

# レファレンスコーナー

県立図書館に寄せられたレファレンスの事例を紹介します。



Q J.F ケネディ大統領が尊敬する人物に上杉鷹山うえすぎやうざんの名前を挙げたといわれていますが、正確な日時を知りたい。

## 〔回答〕

上杉鷹山は江戸中期の米沢藩主です。儉約・殖産興業政策などで藩政改革に努め、多くの格言を残しました。藩主の心得として伝授した「伝国の辞」や、「なせば為る なさねば為らぬ 何事も」は有名です。明治時代には内村鑑三の『代表的日本人』で優れた日本人の一人として名前が挙げられている他、国定教科書にも模範的な人物として掲載されています。

ケネディが大統領就任時に、尊敬する人物として上杉鷹山の名前を挙げたというエピソードは様々な文献で引用されていますが、正式な記録は残っていません。一説では『代表的日本人』を読んだケネディが感銘を受けたのではといわれています。大統領就任中（1961年～1963年）に関連記事があるのではないかと考え、新聞記事をデータベースで検索しましたが見つかりませんでした。併せてケネディ、上杉鷹山関連の資料を確認しましたが見つけることができませんでした。同様の質問が「レファレンス協同データベース」にも掲載されていましたが未解決でした。

調査を進める中で長女キャロライン・ケネディ駐日大使が2013年11月に都内で講演した際、「父（ケネディ大統領）は上杉鷹山を称賛していた」と発言したという記事を見つけました。これを基に2013年11月・12月の新聞記事のデータベースと「山形新聞」（原紙）を調査しました。

「山形新聞」では2013年12月22日に「談話室」や「読者からの疑問」で取り上げられていたほか、同年12月28日の朝刊「読売新聞」では文書が存在するのではという内容の記事を確認しました。しかし、いずれもいつどのような場で発言したか公式な記録は現時点では不明で、現在も調査中とのことでした。近い将来嬉しい報告があるかもしれませんね。

キーワード： 上杉鷹山 J・Fケネディ大統領 キャロライン・ケネディ駐日大使  
代表的日本人新聞記事



## 〔調査プロセス〕

1. 上杉鷹山、ケネディ大統領関連の資料をブラウジングしたが、見つからなかった。
2. 大統領就任中の記事を朝日新聞データベースで検索したが該当記事は見つからなかった。
3. 内村鑑三『代表的日本人』を確認する。
4. キャロライン・ケネディ駐日大使の記事を基に、2013年11月・12月に絞ってデータベースと、山形新聞を調査。関連記事が見つかったので紹介する。

## 【参考文献】（ ）内は当館請求記号

- 1 『代表的日本人』  
内村 鑑三 // 著 鈴木 範久 // 訳 岩波書店 1997年 (281.04/ウチ)
- 2 『朝日ソノラマアメリカ大統領演説集』  
朝日ソノプレス社 // 編・出版 1964年 (312.53/ア1/1)
- 3 『小説上杉鷹山』上巻・下巻  
童門 冬二 // 著 学陽書房 1983年 (913.6/ドウ1・2)
- 4 「山形新聞」(2005年4月1日～)
- 5 当館契約データベース(電子資料)  
・「聞蔵Ⅱビジュアル」 ・「ヨミダス歴史官」 ・「毎日 NEWS パック」





Q.『奥の細道』には平泉を訪れた時「笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ」とあるが、芭蕉が平泉の高館で涙を流していたのは何時頃だったのか。

### 〔回答〕

『奥の細道』にはもちろん、旅に同行した河合曾良の『曾良旅日記』にも、高館で涙を流していた時刻の記述はありません。この問い合わせを受けた時、音を上げそうになりました。とにかく、事実を一つ一つ解き明かすようなかたちで、調査することにしました。

はじめに、涙を流した時間の長さを考えてみました。芭蕉は「時のうつるまで」と記しています。「時のうつるまで」とはどのくらいの時間をさすのでしょうか。『奥の細道』研究資料の書架をブラウジングして手に取った一冊に「一刻が過ぎるほどの時間である」という記述を発見しました。『芭蕉と奥の細道論』という資料です。一刻とは現在の約三十分であることを、『日本国語大辞典 第1巻』（小学館）で、確認しました。

つぎに芭蕉が平泉に滞在した時間を調べました。『曾良旅日記』にはこの日、宿泊している一関を「巳ノ剋」に出立し「申ノ上剋」帰るとなっています。この時刻を現代の時間になおして論じられている資料を調べまし、帰った時刻はだいたい午後四時ごろと一致していますが、問題は出立した「巳ノ剋」です。資料によってまちまちで、一番早いものは『奥の細道の旅ハンドブック』の午前八時ごろ、遅いものは『奥の細道を歩く』の午前十時でした。二時間もあります。

これではと、調査をあきらめかけました。しかし平泉を巡った順路について、『奥の細道』と『曾良旅日記』は、一番はじめに高館に行ったことを記しています。これなら正確な時刻までは分からないとしても、だいたいの時間帯の見当をつけることができるのではと考え直しました。

二人が平泉に到着するまでにかかった時間を調べてみました。出立時間が書いてあった先の二冊の資料には、どちらも一関から平泉まで往復三時間と記されていました。片道一時間半です。『おくのほそ道を歩く：宮城・岩手』には、往路について二時間弱との記述がありました。これによって、到着時刻を推測できます。

以上のことから、高館に足を運び、涙を流したのが約三十分あまりとすると、出立時刻に二時間の差があったとしても、芭蕉が涙を流したのは、午前九時半過ぎから正午ごろまでの間と、判断することができました。

キーワード： 松尾芭蕉 奥の細道 曾良旅日記 平泉 高館 時のうつるまで

### 〔調査プロセス〕

1. 『奥の細道』『曾良旅日記』の記述を確認。
2. 「時のうつるまで」とはどのくらいの時間をさすのか調査。
3. 平泉に到着した時刻を調べる。
4. 平泉の順路を確認し、時間帯を判断した。



### 【参考文献】（ ）内は当館請求記号

- 1 『芭蕉と奥の細道論』丸山 茂 // 著 新典社 1995年 (K915.5/マル)
- 2 『奥の細道の旅ハンドブック』久富 哲雄 // 著 三省堂 2002年 (915.5/マツ)
- 3 『奥の細道を歩く』関屋 淳子 // 監修 JTBパブリッシング 2009年 (915.5/マツ)
- 4 『おくのほそ道を歩く：宮城・岩手』田口 恵子 // 著 歴史春秋出版 2009年 (K915.5/マツ)

※このレファレンス詳細は「レファレンス協同データベース」で公開されています。是非ご覧ください。  
「レファレンス協同データベース」 <http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>